

皆さん、こんにちは。福岡国際医療福祉大学の平島と申します。本日は聴覚障害を理解し豊かな力を育てていくための幼児期の関わりについてお話をいたします。

多くの難聴の子供たちが補聴器や人工内耳を装用して、音を聴くことができるようになってきました。補聴器は音を大きくします。人工内耳は聴力にかかわらず、ささやき声に相当するような小さな音を聴くことができるようになりました。しかしながら、補聴器も人工内耳も聞こえている人と同じように聞こえるわけではありません。

特に人工内耳は、電気で聴神経を刺激するという方法をとっているため、聞こえている人とは全く異なる音が聞こえているということを理解する必要があります。補聴器や人工内耳は雑音がありますと、非常に聞きにくいということがあります。

聞こえている人たちは、いろいろな音があっても聞きたい音を選別して聞くことができます。しかしながら補聴器や人工内耳は、すべての音を届けてしまうため、必要でない音も聞こえ、邪魔をしてしまうこととなります。また、音や言葉が聞こえたとしても言葉の意味や内容を知らなければ、わからないということとなります。

重度の難聴児が人工内耳によって、補聴器では難しかった聞こえを得ることができるようになりました。①は、人工内耳をつけたときの聞こえ。装用閾値といいますが、30 デシベルという、先ほどのささやき声に相当する小さな音が聞こえるようになりました。しかし②の単語理解度、これは言葉の聞こえになりますが、聞こえている人を100としますと、50%から98%と子供によって異なりますが、100%の聞こえを得るものではないということが分かります。

③は、この子供たちの言葉の発達になります。100が年齢相応だとすると、平均で80の位置にあることがわかります。これは言葉の力が遅れていることを示しています。人工内耳によって聞こえが得られるようになったにもかかわらず、言葉は育ちにくいということです。

ここで言葉の育ちについてお話しします。言葉は人とのコミュニケーションの中で育ちます。そして、理解できた後に表出できるようになります。理解できない言葉は話せないのです。そして理解できる言葉が増えてきて、やっと文で表現できるようになります。また言葉も生活で用いられる言葉から、学習で使われる難しい言葉へと進んでいきます。まとまったお話ができるようになると、小学校では作文を書くようになります。まとまったお話ができるようになるためには語りたい内容についての経験や知識が必要です。

## 手書き第1問 平島

さて、コミュニケーションの始まりはおうちの人声に気づき、相手の顔をじっと見ることから始まります。これは他者の感情の理解にもつながっていきます。難聴があると、おうちの人声に気づきにくいのです。ですから顔を見せ、顔や体を触って気づきやすくしてあげましょう。補聴器をつけるようになった後は、しっかり声も聞かせてあげましょう。